

つけて道へ上がれ」と言う祖母の声に、みんなは梁や柱を伝って右岸の道に上がりましたが、この時には津波はほとんどひいていました。

みんなで小松屋の前の広い通り（東七間町）を南へ、初めての交差点を東に向かいましたが、当時の道路は今のよう舗装はされておらず、津波で土が洗い流され、角のたつた小石がむき出しになっていて、水にふやけきつた素足には突き刺さるような痛みをおぼえ、泣きそうな顔で踵をひくようにして痛さをこらえて歩きました。

日の出橋までは、町並に何ら変わりはありませんでしたが、橋を渡ると様相は一変し、坊小路地区は全壊状態で荒地と化し、残っていた家は半壊も含めて六軒ぐらいでした。町はずれると路面は普段と変わらず、足の痛みも和らいだが、みんなは無言でも振り返らず、びしょ濡れのまま灘（大平間）の伯父の家を頼って行きました。

伯父の家には親戚の人たちが大勢避難してきており、すぐに母や叔母を捜しに出してくれました。私は濡れた衣類を焚火で乾かしてもらいました。夜勤を終えて惨状を知り、私たちを尋ね捜してきた兄と共に、母たちを捜しに行きました。

大牟岐田の田圃には漁船が何隻もすわっており、蒲団や衣類、家財等が散在し、遺体もあちこちで見られました。昼前に母が、午後になって叔母が遺体となって見つかり、十分な弔いもできないまま翌日埋葬されました。

次の日に家の跡地に行くと、地盤石も流されて跡形もなく、打抜き井戸ポンプの跡に、赤錆びた鉛管が立っているのみでした。

ふと屋根に置いた上着のことを思い出し、取りに行くと上着は二階の窓の小庇の上に乗っており、川の中に積み重なっていた柱等はほとんどなくなつて、三間余りの梁が一本残っていただけでした。伯父の家で一週間ぐらい世話になり、その間に拾い集めた数枚の蒲団等を、兄と二人で灘神社（権現さん）前の谷川まで運び、丸洗いして乾かし、救護物資の毛布、衣類、食料等の支給も受けました。幸いにも通称「棒木」の畑に九尺×二間の納屋があり、ここで国の援助金を受けて外周りの出来た建築半ばの家に入居するまでの七か月余を過ごしました。

津波に対する知識も現在に比べると乏しく、大地震の後に津波が来るとは聞いていても、まさかこのように早く襲ってくるとは、祖母や母も思ってもいなかったのではないかと思います。

悪夢のような南海地震津波のことは、思い出すと気持ちが滅入り、あの時に欲をすててすぐに逃げていればと今だに悔やまれます。